

知事賞

【題名】 歴史と未来
【学校・学年】 鳥取大学附属中学校一学年
【氏名】 本庄 泰都

今でもはつきり覚えていいる。姫路城の眩しいほどの白さ。迫ってくるような大きさ。石垣の荒々しさと巧みさ。小学校一年生の秋だった。世界遺産というものを見に行こうと、家族で姫路城に行った時のことだ。ちびっこの私は、「歴史」というのは、こういうものなのだ。言葉にはできないが、心で感じていた。それから、日本各地のお城を、家族で巡っている。

□のぼうの城□。石田三成を主人公とする歴史小説だ。三成が成田長親の守る忍城を攻める場面で、長親が降伏条件としてこう語る。『まず、戦で荒した農地を回復せよ。農民の生活を守らねばならぬ。』田畑、つまり領民の生活を守る。』という姿勢が印象的だった。領主や武将には、物事を鳥瞰的に捉える姿勢が求められる。自分たちの権力争いだけでなく、民の生活を守ることを優先させた長親の姿勢に、胸が熱くなった。姫路城で感じたあの何かがよみがえってきた。『守る』ということ。

歴史に心を揺さぶられるのは、そこに、「大切なるものを守る」という思いが必ず存在するからではないだろうか。歴史とは、戦いも、政治も、経済も、学問も含め、何かを守っていくことの積み重ねだ。守るための営みが、文化や建築などの技術を高め、豊かにしてきた。

いま、世界は新型コロナウイルスと戦っている。私にとって「世界」という言葉は、遠い場所を指す言葉だった。しかし今、私は世界のど真ん中に立っている。世界の出来事は遠くではなく、私自身に起きていることなのだ。日々実感する。世界、国、地域、そして私たち。組織から個人に至るまでが、大切なものを守るための時間を過ぎしているのだ。ずっと家にいて、窮屈さを感じることもある。しかし、そんな生活も、いつもなら後回しにしてきたことや、今までならば適当に済ませていたことを丁寧に見直し、実行する時間へと変化していった。これも、私たちに

できる「守る」ではないだろうか。ただ漠然
 と一日を過ごすのではなく、何かを少しずつ
 でもよくなつていくよう考え、行動すること。
 その積み重ねが未来を創っていく。そして、
 その未来がいつか歴史となつていく。より良
 い未来を創ると信じて積み重ねていくのだ。
 どの時代の人もそうやって生きてきた。だ
 からこそ、「歴史」に触れたとき、あるとき
 のように胸が熱くなるのではないだろうか。
 まだまだ、行ってみたい城郭がたくさんあ
 る。句のぼうの城の舞台となつた忍城にも
 行ってみたい。早く、そんな日が来るといい。
 安心して、家族と城巡りを再開する日を私は
 心待ちにしている。大切なものを守りながら。
